■花井（三重県熊野市紀和町）

私は花井という地名を見て「はない」と思っていたが、これで「けい」と読む。

この花井という集落が、どこにあるか知っている人は少ないと思う。

北山川沿いには沢山の集落があり、以前紹介した九重の対岸が花井である。

いまは山道を車でグニャグニャと走れば花井に着くが、昔は道路などなく、川を渡らなければ行けない場所であった。

この花井という集落は、九重の集落と、とても繋がりが強かった。

昔、九重には小学校があり（現在はカフェや本屋さんとして利用されている）、その学校の南側（下流）が花井だったのだ。つまり北山川の右岸（現・和歌山県側）も左岸（現・三重県側）も花井。地区を分断するように川があり、渡し舟で行き来していた。

道路がなかった時代、材木や生活物資を運ぶ為に北山川が大きな役割を果たした。しかし、この川がある為に不便な生活を強いられた人々も多くいた。

橋がないため、川が増水すると行き来できなくなる。左岸に病人や怪我人がいても、診療所に運ぶため、右岸に渡る事も出来ない。

実際に、孤立していた左岸から、現在の新宮市の方に山道が繋がっていた右岸に引っ越して来た人もいたそうだ。

今回は、その方にお話を伺う事ができた。

渡し舟で渡してくれるようになったのは戦後で、それまではみんな自分の家にある舟で渡っていたという。しかし舟で川を渡るには、櫂（かい）や棹（さお）の技術や、経験も必要だ。左岸（現・三重県側）に嫁いだ方の話では、ご自身は舟を操れなかったので一人

では行く事が出来なかった。誰かが渡る時に一緒に渡してもらったそうだ。しかし帰ろうと思っても、舟を操れる人がいないと帰れない。家が対岸のすぐ近くに見えているのに帰れず、半日待った事もあるという。

やはり、この地方はどの地区も渡し舟では苦労したのか「舟で渡らないと行けない所には嫁に行くな」と言われた事もあったようだ。

明治の廃藩置県によって、北山川の右岸が和歌山県になり、左岸が三重県になった。

この時集落の人々は「今まで通り、川の両岸とも花井で通していこう」と抵抗したようである。もちろん住民の意見など通る時代ではない。和歌山県側の花井地区はこの時になくなってしまったのである。

そして三重県になった左岸の花井は、集落に道路が出来て便利になっていったのだが、みんな年を取り、もっと便利な都会に移り住み、今この花井には誰も住んでいない。

変わりゆくものと、変わらず残るものがある。

花井から見える九重（元花井）

花井の空き家たち

今から約 170 年前（1847 年）、花井地区で赤痢（せきり）や疫痢（えきり）が流行り、その病を鎮めてもらおうと、愛知県の津島神社から分霊をし、集落の裏山の絶壁の所に祇園様として祀った。人々がいた頃は旧暦の５月と１１月に祭りがおこなわれ、赤飯を供え、山の中で餅まきもしたそうだ。

だが祀られたのが山の中の絶壁で、お年寄りには険しすぎる道のりのため、祇園様まで行ける人がだんだんと少なくなり、今では誰も行けなくなってしまった。

それはさぞかし祇園様も寂しかろうと、道を教えてもらい、行ってみる事にした。長年誰も通っていないのだろう、道かどうかも分からない状態だ。不安を抱えながら歩いて行くと、大きな岩が見えてきた。近づいてみると、その岩肌には誰かが削ったであろう小さな階段があった。それを上に上に登った所に祇園様が祀られていた。岩が自然と削られた窪みが、屋根の役割をしている。そこにお社（やしろ）を作り祀っていたようだ。風化のためだろうか、残念な事にその小さなお社は壊れてしまっていた。真ん中に細長い石が置いてあったので、ご神体なのかどうかは分からないが、とにかく手を合わせ、ミカン５個と白ご飯をお供えしてきた。

祇園様のある絶壁

祇園様

花井では、キュウリを栽培しなかったのだという。

津島神社から分霊の際に、キュウリは栽培しないと約束した　という話だ。キュウリの切り口が祇園様の神紋に似ているからなのか、その真相は分からない。今現在も和歌山県側の元花井の人達は、祇園様との約束を守りキュウリを栽培していない。

祇園様が祀られ１７０年。険しすぎて人々が参拝できなくなった祇園様と、キュウリを栽培しない約束。変わりゆくものと、変わらず残るものがある。

人々に忘れ去られつつある神様。限界集落化と、便利になりすぎる世界で、こういう場所が増えているのかもしれないなと感じた。またいつかここに来よう。次回は赤飯を持って来よう。神様はそれを首を長くして待っているかもしれない。

集落がなくなるのはとても寂しい事だ。

先ほど、花井にはだれも住んでないと書いたが、最後の最後まで花井を残そうとする人がいる。元花井の住人で大工のＡさんだ。

「自分の故郷が消えてしまうのが寂しい」と、花井に自分の作業場を作り、時々通っているという。偶然お会いする事が出来て、お話を伺った。

２０１１年の紀伊半島豪雨水害の時も花井にいたそうで、作業場にいたら水没しはじめ、実家の方に移動したが、また水が入って来たので、どうにか２階の屋根の上に避難した。安心したのも束の間、家ごと流れ始めて、慌てて近くにあった木の枝につかまり山に逃げ助かったそうだ。まさに九死に一生。大工さんだったから身軽で助かったのだろうなぁと思う。

この様な事は、花井だけではなかっただろう。花井地区は、広い川原があるものの、そんなに高くない位置に民家が数軒ある所だ。同じような条件の集落は、この北山川沿いにはいくつかあり、多くの人々が生活してきた。きっと台風の季節になると、不安で落ち着かなかっただろう。

花井の人々の生活について記しておく。

川のすぐそばという事もあり、団平船に乗る人や、筏師も数名いたそうだ。山で木を切る人、山から木を運び出す人、木で筏を組む人、筏を操る筏師という風に、いくつかの仕事があったという。

また北山村方面の筏師が、中国の鴨緑江へ筏を教えに行った【伝説の筏師】の話はよく耳にする。この花井からも鴨緑江へ行った人がいたという。

対岸の九重地区は筏の中継地点として筏の宿もあった。夜になると上流から来た筏で川がいっぱいになり、歩いて渡れるくらいだったという。

また和紙作りがおこなわれていた場所でもある。この和紙作りを伝えた人物というのが、川を 1.5km 程上流に行った場所にある百夜月のお寺の尼さんだという。以前、百夜月の項で書いた美しく聡明な尼さんだ。

花井には、その尼さんのお墓が今も残っている。百夜月にも１つだけお墓があり、それが花井のお墓と殆ど同じ形なのだ。百夜月も同じ花井地区内だが、この百夜月と花井は、川や絶壁、険しい山道にはばまれて、相当な覚悟と体力と運がない限り歩いて行く事が出来ない。ひょっとすると百夜月の人達もお墓参りが出来るよう分骨したのかもしれない。

花井の尼さんのお墓

百夜月のお墓

「この２年で熊に６回もあったわ」

大工のＡさん曰く「熊が道路に飛び出して来て、ビックリした」のだそうだ。

人が少なくなると動物たちは里に下りてくるようだ。私が住んでいる地区でも昔は農作物を動物に食われることなど少なかったのだが、今では柵や網で囲わないと動物たちにみんな食べられてしまう。人の数より野生生物の方がずっと多いし、人の方が檻に入らなければ暮らしていけないのが田舎なのかも。

今、花井という地区は、大工の Ａ さんと釣り人くらいしか足を運ばない場所になってしまった。秘境という名もふさわしいだろう。ただし秘境に足を踏み入れる際は、熊にだけは用心して頂きたい。

平野　皓大